

令和 6 年 5 月 5 日現在

機関番号：32637

研究種目：若手研究

研究期間：2022～2023

課題番号：22K13551

研究課題名（和文）レジリエンスに対する脱・人間中心的アプローチの探究：理論的枠組みの更新に向けて

研究課題名（英文）Non-anthropocentric approach to resilience: Toward a new theoretical framework

研究代表者

栗原 亘（Kurihara, Wataru）

高千穂大学・人間科学部・准教授

研究者番号：80801779

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の元来の目的は、「レジリエンス」をめぐるエコロジー分野における諸議論を、アクターネットワーク理論（ANT）等に代表される脱・人間中心的アプローチ（NAA）の知見を踏まえて、理論的なレベルで精緻化することにあった。しかし、そうした作業のなかで、レジリエンスという発想の可能性と共に、問題点も明らかとなった。そして、その問題点を克服するために、本研究は最終的に、ケアをめぐるNAA的な議論の潮流などを参照しながら、「分業」の理論を人間だけではなく非人間的な存在体を踏まえた上で組み直すことを目指す必要性を提起するにいった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

今日、私たちの生きる「社会」は、気候変動、各種災害に加え、そうした衝撃に対する脆弱性にもつながるインフラの老朽化等、広い意味でのエコロジー的な危機に瀕している。私たちは、いわば、これまで前提としてきた条件が壊れかけた世界を生きているといえる。この状況下で、どのように生存の基盤を存続させるのかを考えるためには、人間だけではなく、人間以外の多様な要素（e.g., 人工物、動植物）との関係も射程に入れた形で「社会」の作り方そのものを再考する必要がある。本研究の学術的および社会的な意義は、レジリエンスという概念を軸にしながら、まさにこうした新たな「社会」を構築するための視点と方向性を示した点にある。

研究成果の概要（英文）：The original purpose of this study was to refine, at a theoretical level, the various discussions surrounding "resilience" in the field of ecology by drawing on insights from non-anthropocentric approaches (NAA), such as Actor-Network Theory (ANT). However, as the research progressed, it became apparent that while the concept of resilience offers significant potential, it also has several problems. Consequently, in order to overcome these issues, this study ultimately proposes the necessity of reconstructing the theory of "division of labor," taking into account not only human but also non-human entities, by referencing trends in NAA discussions about "care".

研究分野：社会学

キーワード：アクターネットワーク理論 脱・人間中心的アプローチ エコロジー サイエンス・スタディーズ ケア

1. 研究開始当初の背景

研究を開始した当時、「人新世」などの言葉のもとで、人間の活動が地球環境に対する決定的な影響力をもち、さらにそれを不安定化させてしまっているという言説が注目されていた。そして「社会」の在り方そのものを構想し直さなければならないという議論が、アカデミックな世界の内と外を問わず、活発に提起されるようになっていた。そうしたエコロジーをめぐる言説のなかで、「レジリエンス」という語が、「サステナビリティ」や「順応」などと共に、欠かすことのできないキーワードの1つとして盛んに言及されていた。

本研究プロジェクトは、まさにこうした「レジリエンス」をめぐる諸議論に貢献することを目指して成立した。研究開始当初の時点で、本研究の代表者は、このプロジェクトに選好する2019年度から2020年度にかけておこなった研究プロジェクト「脱・人間中心のアプローチの探究：アクターネットワーク理論とその周辺」の中で、レジリエンスという概念とそれに基づいた実践の重要性を指摘し、プロトタイプ的な議論を提起していた。そしてそこにおいて、代表者は、脱・人間中心のアプローチ（NAA）の観点からレジリエンス論を理論的に更新することを主張した。

ここでいうNAAとは、人間だけではなく、その他の非人間（各種人工物から動植物までを含む）のエージェンシーを十分に把握することが必要であるとの認識を共有する諸議論である。代表的な立場に、アクターネットワーク理論（ANT）などがある。ANTをはじめとするNAAは、脱・人間中心の観点を徹底していくなかで、「社会」と「自然」というカテゴリーを取り払い、人間と非人間とが連関しながら形成するネットワークないし「集合体」を可視化することを試みてきた。

本研究は、こうしたNAAの脱・二元論的とも形容できる立場から、特に、レジリエンス論の多くが半ば暗黙のうちに立脚している社会-生態システム（SES）というモデル——それは、「社会システム」と「生態システム」は「相互に不可分に結びついている」と想定するなかで、結局は「社会」と「自然」というカテゴリーを前提にしている——を捉え直し、組み直す必要があるとの認識から出発した。すなわち、NAAの立場からすれば、レジリエンス論の多くが想定しているような、社会システムと生態システムがカップリングした状態としてのSESではなく、人間と非人間とが入り乱れて構成する「集合体」を捉え、それをレジリエントにすることを考えるべき、ということになる。研究は、まさにこうしたNAA的な観点から、SESモデルの更新をはかる必要があるという認識から出発したのである。

2. 研究の目的

本研究は、上述した通り、NAA的な観点から、特にレジリエンス論のSESモデルの更新をはかることを目指して開始された。すなわち、SESという枠組みを、NAAの脱・二元論的な観点から捉え直すことで、人間偏重的な観点と非人間偏重的な観点（e.g. 環境決定論、技術決定論）のいずれをも回避する形でレジリエンス論を構築し直すことを目指すことから出発した。しかし、後述するように、研究を進めていくなかで、レジリエンスという発想そのものに付随する問題に

直面することとなった。この問題を乗り越えるべく、本研究は最終的に、ケアをめぐるフェミニズムの議論の潮流などをふまえたうえで、さらに適切なエコロジーをめぐるポリティクスに関する理論の構築を目指すこととなった。

3. 研究の方法

①まず、レジリエンス論の成立・展開過程を追ったうえで、現在どのような議論が存在し、互いにどのような関係にあるのかを整理した。そうするにあたっては、レジリエンス論関連の主要な専門誌 (e.g., Ecology and Society) に掲載されている論稿などはもちろん、さらにいわゆる一般書や行政文書のなかでレジリエンスがどのように論じられてきたかについても検討した。また、②レジリエンス論がどのような評価をなされてきたのかについても確認した。レジリエンス論に対しては人文社会科学系の立場からの批判も存在する。レジリエンス論の多様さを踏まえたうえで、それぞれの議論に対しどのような批判がなされてきたのか、それは的を射たものなのか等を検討・整理した。

以上をおこなうと同時に、③NAAの諸議論の展開についても包括的に調査し、整理・検討をおこなった。なお、①と②の作業の結果、レジリエンス論そのものが有する問題が浮き彫りとなった後は、その乗り越えを目指して、NAAの議論のなかでもケアをめぐる諸議論などを中心に収集と検討をおこなった。

4. 研究成果

以下では、本研究で得られた研究成果について時系列的に記述する。

2022年度の研究成果

2022年度は、レジリエンス論とNAAそれぞれに関する資料の収集・整理・検討をおこなった。まず、レジリエンス論の資料については、レジリエンスやその周辺に関する理論的な議論から、その実践的な応用を目指した議論、さらにレジリエンス論に対して批判的な議論まで、幅広く収集した。そして、これらを検討し、議論の現状の把握を試みた。

その結果、理論的なレベルでの洗練の試みやレジリエンスの発想にもとづく多様な実践的試みが活発に提起され続けている一方で、レジリエンス概念の定義の曖昧さや、その保守的な性格などに由来する限界に対する批判も数多く存在している現状が浮き彫りとなった。とくにレジリエンス概念に基づく様々な実践の中には、「力のポリティクス」と呼べるような発想にとらわれているものが多く、そのことがエコロジーをめぐるポリティクスのさらなる進展を妨げうることも明らかとなった。

NAAについては、特にANTと強い影響関係にある諸議論を中心に、それらに対して批判的な議論も含めて幅広く資料を収集し、NAAをめぐる議論の現状を把握・検討することを試みた。

その結果、今日では、NAA 的な観点から具体的な実践を生み出そうとする試みが数多く展開されるようになっていたことを確認することができた。同時に、そうした多様化する NAA 的な実践の試み自体をも含めて記述の対象とする立場（本研究では、これこそが ANT の元来の立場であると捉えている）に立つこともまた、ますます必要となっているという見解に至った（この検討の成果については、『現代思想』第 51 巻 3 号に寄せた論稿内においてその一部を公開した）。そして、こうした NAA 的な発想に基づく実践そのものを含めて記述の対象とするような立場は、上述したようなレジリエンス論が抱える問題を乗り越えるうえでも役立つだろうという見通しを得た。

2023 年度の研究成果

2023 年度は、2022 年度に特定したレジリエンス論をめぐる問題を乗り越えるための作業をおこなった。乗り越えるべき問題は主として以下の 2 つであった。まず、①レジリエンス概念およびそれに基づくアプローチが有する保守的な性格（e. g., 既存の政治・経済体制そのものの構造的な問題自体を問うことなく、それを温存してしまうような性格）が、場合によっては、現在のエコロジ的な危機において本来採られるべきアプローチの採用を妨げてしまったり、既存のさまざまな問題をそのまま持続させてしまったりする傾向を生み出しうるというものである。また、もう一つは、レジリエンス概念に基づく実践の多くは、望ましくない何かとの「闘争」（e. g., 「気候変動と戦う」）を主軸とした、いわば「力のポリティクス」と呼べるような発想を暗黙のうちに採用してしまう傾向にあるが、こうした発想は多様な存在を可視化し、共生の在り方を模索するという、レジリエンス論が本来取り組むべき課題を見えにくくしてしまっているというものである。

以上を念頭に、2023 年度には、NAA の議論の中でも、特に「ケア」の発想を前面に押し出したフェミニスト科学論の立場などを参照しながら研究をおこなった。また、それと同時に、今後のレジリエンスを考えるうえでも不可欠な要素の 1 つと考えられる人工知能技術に着目した検討をおこなった。

その成果の一部は、早稲田社会学会大会シンポジウムにおける報告、およびそれを元にした論文（「AI と『共に生きること』を考える：B. ラトゥール・マンの連関の社会学を出発点にして」『社会学年誌』65）などの形で公開した。さらに、以上の成果を生み出す過程においては、名古屋大学大学院人文学研究科附属人文知共創センター・研究プロジェクト「人間・社会・自然の来歴と未来 -- 「人新世」における人間性の根本を問う」第 3 回研究集会に参加し、他のプロジェクトに参加している研究者との意見交換もおこなった（その際におこなった報告の pdf ファイルは研究代表者の researchmap において公開している）。

以上の作業を通し、今後展開すべき研究プロジェクトの方向性を明確にすることもできた。それはすなわち、力のポリティクスを追求する闘争的なロジックではなく、世界の維持と修復を主軸とするケアのロジックにもとづき、多様な「負担」の分有のための「ワークネット」のデザインを考える新たな分業の理論を構築するというプロジェクトである。そこにおいては、人間中心

的に捉えられてきた「分業」の概念を、非人間をも含むような形に拡張することがまず目指される。また、さらに、経済活動に限定されがちな分業の概念の組み直しも試みられる必要がある（これは、上述した名古屋大学における研究集会における討論の結果明確化した論点である）。こうした作業を経てはじめて、レジリエンスをはじめとする多様な概念を捉え直し、適切なエコロジーをめぐるポリティクスに関する構想を生み出すことが可能となる。これが、本研究が最終的に得た知見である。

以上からも明らかのように、本研究プロジェクトでは、レジリエンス論そのものを更新するという作業については完遂することができなかった。しかし、そもそも暗黙のうちに望ましいものとして掲げられてしまいがちな「レジリエンス」という発想がはらむ問題点を特定し、さらに適切な研究プロジェクトの構想へとつなげることができた。こうした点において、本研究プロジェクトは、学術的にも、社会的にも有意義なものとなったといえる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 栗原 亘	4. 巻 51
2. 論文標題 一介のアリ (ant) であり続けることの意味と意義：運動体としてのアクターネットワーク理論の現在とこれから	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 216-228
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 栗原 亘	4. 巻 65
2. 論文標題 AIと「共に生きること」を考える：B. ラトゥールの連関の社会学を出発点にして	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 社会学年誌	6. 最初と最後の頁 49-62
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 栗原 亘
2. 発表標題 AIと「共に生きること」を考える：B. ラトゥールの連関の社会学を出発点にして
3. 学会等名 第75回早稲田社会学会大会シンポジウム：「社会」の中の「人工知能 (AI)」を考える 「人間以外」と向き合う視点の構築に向けて
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 栗原 亘
2. 発表標題 連関の社会学と共-存への問い：異種混成的な「しがらみ」をめぐる記述と実践に向けて
3. 学会等名 名古屋大学大学院人文学研究科附属人文知共創センター・研究プロジェクト「人間・社会・自然の来歴と未来：「人新世」における人間性の根本を問う」第3回研究集会（招待講演）
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------